

東京大学 文書館ニュース

The University of Tokyo Archives Newsletter

vol. 56, Mar. 2016

柏分館に新しい書架が入りました



法人文書の本格的な移管に備え、文書館柏分館にはすでにあった2部屋に加え、新たに4つの部屋を確保し書架を設置しました。現在は窓に遮光カーテンがかけられています。

Contents

- 2 第14回東京大学
ホームカミングデー
加藤 諭

- 3 柏キャンパス一般公開2015
白川 栄美

- 4 講義ノートの世界
森本 祥子

- 6 特定歴史公文書等の新規公開について(2016年8月1日
~2016年1月31日)・歴史資料
等の公開について(2016年1月
31日現在)

- 7 業務日誌(抄)
(2015年8月~2016年1月)

- 8 文書館トピックス

東京大学文書館のロゴ



東京大学文書館
The University of Tokyo Archives

文書館では2014年10月31日よりロゴを使用しています。東京大学の草創期からの時の流れと、現在に至るまで時々刻々生み出され、これからも作りつづけられる東京大学の「今」を伝える資料をイメージしています。

第14回東京大学ホームカミングデイ

東京大学文書館特任助教 加藤 諭

昨年、2015年10月17日(土)に第14回目となる東京大学ホームカミングデイが開催された。ホームカミングデイでは、毎年様々な年代の東京大学卒業生が集まり、各種講演会、周年学学会、家族で参加できるイベント、模擬店イベント等が開かれるが、昨年はメイン企画の一つとして特別フォーラム「安田講堂の90年～生まれ変わったシンボル、時代の歩みとともに～」が同日安田講堂で行われた。

モデレーターに陣内秀信法政大学デザイン工学部教授、パネリストに藤井恵介東京大学大学院工学系研究科教授、吉見俊哉東京大学文書館副館長(東京大学大学院情報学環教授)、千葉学東京大学大学院工学系研究科教授を迎え、香山壽夫東京大学名誉教授がコメントを行い、東日本大震災後、2013年度から2014年度にかけて耐震化を含めた全面改修がなされた安田講堂を「建築物」としての視点から概観するとともに、時代背景や社会背景を含めた安田講堂の90年の歴史を振り返る内容で、これからの本郷キャンパスそして大学像をも探るものとなった。

東京大学文書館では、上述のように、吉見副館長がパネリストとして登壇すると共に、このホームカミングデイ特別フォーラムを企画した卒業生室に協力し、安田講堂の歴史に関わる資料調査、資料提供及び年表作成を行った。

東京大学文書館には、安田講堂について記されたいくつもの資料が残されている。文書としては、関東大震災を挟んだ安田講堂の建設について学内での体制(建築実行部の規約)、建築経過や費用などが分かる内田祥三関係資料や、設計図面、家具・掛物・植木等、安田講堂竣工時の備付物品などが分かる資産管理部資産課旧蔵資料や管財課旧蔵資料など、大正期の安田講堂設計に関わる資料が充実しているほか、戦前から戦後にかけての安田講堂の利用に関する事例についても、いくつかの特定歴史公文書等から追うことが出来る。東京大学文書館では、そうした所蔵資料の一覧を作成し、パネリストの先生方との情報

共有を図ると共に、こうした所蔵資料や新聞資料、学内広報などから、安田講堂の90年の歩みについての年表を卒業生室からのアイデアも盛り込み作成、年表はⅠ. 安田講堂の建設震災復興の中で(1921～1936)、Ⅱ. 戦時下の安田講堂(1937～1945)、Ⅲ. 戦災復興と戦後の歩みの中で(1945～1967)、Ⅳ. 大学紛争の中で(1968～1969)、Ⅴ. 大学制度改革とグローバルな大学間競争の中で(1970～2015)の5期にその歴史を分け、55のトピックからなる体裁とし、当日の来聴者へ配布された。

また、特別フォーラムでは東京大学文書館の所蔵資料そのものが活用された。東京大学文書館には、大講堂振り鐘が残されており(安田講堂は通称であり、正式な名称は大講堂)、これまでその使用目的は不明であったが、今回式典に関する文書を調査した結果、この振り鐘は戦前期において式典開始の合図に使用されてきたものであることが判明した。そこで、特別フォーラムでは、大講堂振り鐘を使って開始しようということになり、振り鐘の音の合図に続いて登壇者紹介という形で進められることとなった。当日、鐘の音ははっきりと安田講堂の空間に響きわたり、安田講堂のために作られたことが再確認される良い機会となった。



図2大講堂振り鐘

以上のように、今回の東京大学ホームカミングデイ特別フォーラムでは、東京大学文書館の所蔵資料が文書、モノ資料ともに利活用されることとなった。これは文書館として大変喜ばしいことである。適切な環境の下で資料を保存していくことは勿論であるが、その利活用の促進もまた、東京大学文書館が果たして行かなければならない重要な役割だからである。

東京大学文書館は2014年に発足したばかりであり、また、展示機能を有していないため、広くその存在をPRしていく上で、学内外の各種取組との積極的な協力関係は欠かせない。今後とも様々な機会を捉えて、東京大学文書館の所蔵する資料を通じて、東京大学のプレゼンスを高める努力を続けていきたい。

(かとう さとし)

第14回 東京大学ホームカミングデイ 特別フォーラム「安田講堂の90年～生まれ変わったシンボル、時代の歩みとともに～」関係資料

資料ID	資料名	資料内容	資料形式	所蔵部
1-001	安田講堂の建設	安田講堂の建設に関する設計図面、建築費の明細書、関係者の往来文書	文書	建築部
1-002	安田講堂の震災復興	1923年関東大震災後の安田講堂の被災状況、復興計画、復旧工事の記録	文書	建築部
1-003	安田講堂の戦時下の利用	戦時下の安田講堂の用途変更、防空設備の設置記録	文書	建築部
1-004	安田講堂の戦後復興	戦後の安田講堂の改修工事、耐震化の記録	文書	建築部
1-005	安田講堂のシンボル	安田講堂のシンボルとしての振り鐘に関する資料	文書	文書館
1-006	安田講堂の家具・掛物	安田講堂に使用された家具、掛物の写真と説明書	写真	資産管理部
1-007	安田講堂の植木	安田講堂に植えられた植木の記録	文書	資産管理部
1-008	安田講堂の竣工	安田講堂の竣工式に関する記録	文書	建築部
1-009	安田講堂の歴史	安田講堂の歴史に関する年表	年表	文書館
1-010	安田講堂の未来	安田講堂の将来に関する計画	文書	建築部

図1 関連年表

柏キャンパス一般公開 2015

東京大学文書館教務補佐員 白川 栄美

2015年10月23日（金）、24日（土）の2日間にわたり、柏キャンパス一般公開2015「輝く科学、柏から。」が開催され、過去最高の13,000人が訪れた。このイベントに初めて参加した当館では、教員2名、教務補佐員2名、アルバイト2名の体制で下記3つの企画を実施した。

1. 書庫見学ツアー

「アーキビスト体験」として書庫見学ツアーを1日に2回、午前の部と午後の部に分けて行った。書庫内に保存されている収蔵資料を紹介しながら、文書館とは何をするとおき、どのような資料があるかについて、森本祥子准教授（午後の部）と加藤諭特任助教（午前の部）が解説をし、見学者には収蔵庫の中を自由に見てもらった。見学者からは多彩な質問があった。何を文書館で受け入れ、何を図書館や博物館が受け入れるのか、それを決めるのは誰か、博物館と文書館とで資料の取り合いにならないかといった質問に、実際に書庫内で資料を見てもらいながら回答することで、博物館や図書館と文書館の役割の違いについて知ってもらう良い機会になったのではないかと考える。

当初は書庫見学後に資料措置室で資料の簡易な保存措置に関するハンズオン・クイズを行い、資料を予防的に保護することについての理解を深めてもらう予定だったが、見学者数が定員をはるかに上回ったため、保存措置の「体験」ではなく教員による実施の「見学」という形をとらざるを得なくなったことは、次回への反省点である。最後に記念品として、当館のロゴが印刷された中性紙封筒を持ち帰ってもらった。



2. 資料展示

両日とも柏分館の閲覧室を展示室として利用し、6点の資料を展示ケース（企画展示「東京大学の歴史」）に、そして7枚の写真パネル（写真展示「昔の研究室」）を入口付近の壁に展示した。展示キャプションはすべて日本語と英語を併記した。展示ケース2台には、当時の大学生活を垣間見られるような、明治23年の「教育ニ関スル勅語」、旧東京大学初代総理を務めた加藤弘之の学位記や昭和20年代の学生証などを実



物で展示した。見学者が最も興味を示した資料は「恩賜の銀時計」と「東大ダンス講習会の会員証」であった。

来館者は両日合わせて387人。学内からは職員だけでなく留学生を含む学生の来館もあったが、来館者の9割は学外からの参加と思われ、柏市（特にキャンパス近隣地域）に住む方々が多く訪れてくれた。写真パネルの一枚は、当学関係者が柏キャンパスの視察に訪れた1988年に撮影されたもので、その写真を見ながら来館者からキャンパス近隣の歴史をご教示いただく一幕もあった。

若者の来館が予想より多かった。とくに印象的だったのが、熱心に説明を聞いた後、「文書館のようなおきで働くためには将来どのような学部に進学すれば良いのか」と質問をした女子中学生と、展示品を一点ずつ丁寧に鑑賞しながら、古い記録が残っていることに感動し、3年間で読めるようになりたいと『巽軒日記』を手にとっていた2人の女子高生である。今後もこのような催しを通して、アーキビストという職業を知ってもらい、未来のアーキビスト誕生に少しでも寄与できれば幸いである。



3. 刊行物の配付

パンフレット『東京大学文書館ご利用案内』の他に、当館が編集・発行している『文書館ニュース』などの定期刊行物や当館前身組織である東京大学史料室が編集した『The University of Tokyo 1877-2000 "A History—21 Short Stories in Pictures"』（平成12年）等を、展示スペース、柏図書館1階（一般公開総合受付）と総合研究棟1階受付の3カ所で配布した。また、展示スペース内に東京大学の歴史に関する書籍や文書館の活動を知ってもらえるような刊行物を置き、見学者が自由に手にとって読めるコーナーを設置した。

「東京大学柏キャンパス一般公開2015」に参加し、文書館（＝アーカイブズ）は学内外でまだまだ認知されていないことを痛感した。学会等で研究成果を発表すること以外に、このような催しに積極的に参加し、文書館とはどういうところかを知ってもらうこと、また、記録を適正に保存管理することの大切さを伝えていくことの重要性を実感した2日間だった。今年度の反省を活かし、来年度はさらに展示を充実させ、学内外における「アーカイブズ」への認知度を高めることを目標にしたい。

（しらかわ えみ）

講義ノートの世界

東京大学文書館准教授 森本 祥子

あるとき、「昔のノートが見たい」という問合せがあった。文書館への問合せというのは、たいいていは何か出来事について調べたいというものなのだが、ノートそのものが見たいという要望を聞くのは筆者には初めてだった。そのときは、不思議なことに興味を持つ人もいるものだと感心しただけだったが、それ以来、「ノート」というくくりがなんとなく気になっていた。そこで、所蔵資料の内からノートばかりを取り出してまとめて眺めてみた。

するとこれが、いろいろな想像をかき立てる実に面白いものであることがわかった。学生のノートがほとんど利用されていないのが残念で仕方がない。多くの人にノートという資料から情報を引き出してもらおうきっかけとしてもらうため、小稿では思いつくままにささやかな紹介をしたい。なお、文中、人名の後の（ ）に記したのはそれぞれの資料の参照コードである。

1 カタチの変遷

今回所蔵資料で確認した最も古い学生のノートは、明治19年から25年にかけて東京山林学校から農科大学に在籍した佐藤銀五郎 (F0029)



のものである。マーブル模様の表紙に「商標」と書かれたラベルが貼り付けられている。輸入ノートに日本の業者が貼り付けて売ったものだろうか。佐藤の資料には、この形式でサイズ違いの2種類のノートがあり、写真のものは専門科目に使われており、同じデザインでやや小ぶりの縦長のはドイツ語会話のノートに使われている。いずれにせよ、佐藤は学生時代に洋紙の横書きのノートにペン書きであった。

他方、明治30年前後に法科大学の学生だった蠟山長治郎 (F0032) のノートは、和紙に墨で縦書きである。木版刷りの罫紙を四つ目綴じにし、表紙をつけている。罫紙には「松」の字や松の絵が描かれており、ひょっとするとこれは東京大学前にあったという文房具屋の松屋が作成した罫紙だろうかと思われている。

こうしてみると、古い時代の学生が和紙でのちに洋紙にきりかわる、という単純な構図でもなさそうだ。

専門毎の流儀なのか、個人の好みなのか、はたまた教師が外国人か日本人かということで揺れるのか、たったこれだけからでは何の結論も導けないのだが、変化は単線的でないことは確かである。

時代はぐっと下るが、昭和18年～20年に第二工学部で学んだ守矢日出男 (F0212) は、B5サイズで表紙に「學」のロゴが印刷された三省堂製のノートを使っていた。これがいわゆる「大学ノート」の典型だといえるだろう。戦争末期にもかかわらず、紙の質のよいことに驚く。



2 ナカミから垣間見えるもの

大正期の農学部のノートのひとつに、谷口義治が受講した「上野博士 農業工学」(F0116/S2/051、052) がある。この上野博士とは、忠犬ハチ公のご主人様の上野英三郎である。ハチばかりが有名だが、上野博士は日本の農業土木のパイオニアであった。昨年、ハチの没後80年を期してハチと上野博士が再会を喜ぶ銅像が農学部に設置されたが、偶然なことにこの資料が当館に寄贈されたのも、同じ2015年のことだった。

ノートを開くと、見開きで右ページに講義内容が書き留められており、左ページは原則白紙である。このようなノートの使い方は比較的一般的だったようだ。左ページには、図や単語の意味がメモしてあったり、要点が抜き書きされていたりする。

また、講義記録は基本的には日本語なのだが、折々英語とドイツ語の単語が入り交じっている。ひとつのページに、「Bach が集ッタナラバ Fluss ト云フ」(Bach は小川、Fluss は河川の意)「中流ハ Hilly land」、という具合である。農業土木という分野で、アメリカ流を多く採用した農学と、ドイツで発達した地理学とが日本で融合したのかもしれないと想像してみる。

違う点から興味深いノートが、蠟山長治郎手元の明治30年の「梅謙次郎「民法」目録総論」(F0032/01) である。講義を始めるにあたり、梅教授は、次のように学生に述べたと、ノートに書かれている。

諸君、余ハ民法ノ講座ヲ担任シ三年ノ間諸君ト共ニ
 斯学ヲ研究シ其蘊奥ヲ討盡スル大責任ヲ帯ヒタリ
 顧ミレバ余ノ民法ヲ教授スルヤ久シ未タ嘗テ其教
 授セル所ヲ以テ満足ト思ヒシ事ナシ 余常ニ同一
 ノ科目ヲ担任スルモ肯テ同一ノ講義ヲ繰回スヲ欲
 セズ毎歳之ニ新説ヲ加ヘ陳腐ノ論ヲ去リ之ヲ改丁
 セリ 今ヤ諸君ニ講義スルニ当リ微力ノアラン限
 リヲ盡シ大学ノ講義ノ名ニ背カラサルモノヲ教授
 シ庶幾クハ平常ノ希望ヲ満足セン事ヲ欲セリ

真剣をつきつけるような梅の覚悟が、学生のノート
 を介して伝わってくる。このように教師側の心情が
 ノートに書き留められているのは珍しく、このときの
 教室の雰囲気や垣間見る思いがする。



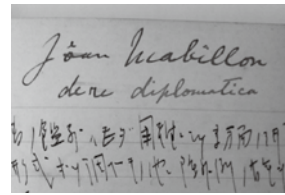
同じ蠟山のノート
 に、「一木教授 国
 法学」(F0032/13)
 と「穂積八東先生口
 述 大日本帝国憲法
 講義」(F0032/08)
 がある。天皇機関説
 をめぐり、それを主
 張した一木喜徳郎と
 それに反対の立場を
 とった穂積八東の両
 方の講義ノートを読

み比べることが可能である。ノートは学生の理解とい
 うフィルターを通したものであり、教授自身の手にな
 る論文とはまた違った点があるかもしれない。ノート
 を読み解くことで、本人の主張の真意とは別に、受け
 止める側がどのように理解したのか、ということを検
 証するヒントが得られないだろうか。

さて、アーキビストとしては、坪井九馬三による講
 義「史学研究法 年代学」(F0041)を取り上げない
 わけにはいかない。明治40年に文科大学史学科を卒
 業した村上兵助のノートである。文科大学には、基盤
 整備をした雇い外国人教師のリースに始まり、岩倉使
 節団に随行してヴェネツィアでアーカイブズを見てき
 た久米邦武(明治21~25年)、その後継者として古
 文書学の確立に尽力した坪井九馬三(明治24~大正
 12年)、パチカンのアーカイブズを見てきた箕作元八
 (明治35~大正8年)がおり(青山英幸『アーカイブ
 ズとアーカイバル・サイエンス』、岩田書院、2004年)、
 この「史学研究法 年代学」は必修科目だった。この
 頃の文科大学では、あるいは現在の日本よりはるかに
 西洋のアーカイブズが学ばれていたかもしれない。

そのことを知る絶好の素材が、この村上の筆記ノー
 トである。がしかし、ノートは一見するとヘブライ文

字かと思われるようなクセのある文字で埋め尽くされ
 ている、このノートを解読するには根気がいりそうで
 ある。それでも、スペリングをあとから確認して書
 き足したものであろう、欄外に「Jean Mabillon」(17

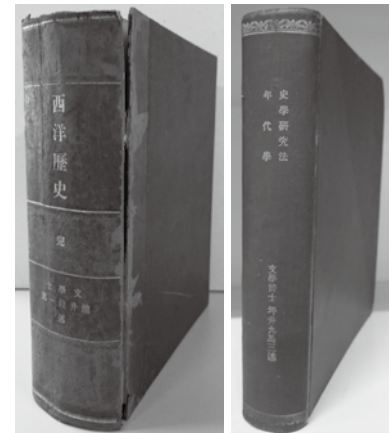


世紀フランスの古文書学
 者)の名前の走り書きな
 どを見つけると、ぜひと
 も講義の中身が知りたく
 なる。

3 学生にとってのノートとは

昭和17年に法学部に入学した高浦昭は、入学して
 1年半で学徒出陣することとなる。幸い高浦は無事に
 戦争を乗り越え、孫に囲まれるまでの天寿を全うした
 が、出征時には長兄に講義ノートを3冊託していった。
 ノートは「政治学史(南原教授)」2冊と「民法第二部(我
 妻栄教授)」(F0109)である。高浦の夫人によれば、
 高浦はどうしても我妻栄の講義が聴きたくて東京帝国
 大学に入ったのだという。

先に紹介した村上兵助のノートもそうであるし、ま
 た他にも同じ例が見られるが、時に学生はノートを製
 本し立派な表紙をつけて大切に保存した。これは日々
 勉強するために
 やったというより
 は、ノートという
 ものとそれにまつ
 わる記憶や思いが
 その人にとって大
 切な意味を持った
 ためと考えるべき
 であろう。無論、
 すべての学生に
 とってノートがこ
 れほどまで大切だ
 ったとは言わない
 が、こうして製本
 されて大切にされ
 てきたノートや、
 出征時に形見のつ
 もりで残していつ
 たノートに出会う
 と、大学に進学す
 ることがごく稀だ
 った時代、その人
 の人生にとって学
 生時代の記憶がも
 つ意味、価値を思
 わせられる。



翻って、現代の学生はどうであろうか。当館でアル
 バイトをしている20代半ばの大学院生は、大学ノー
 トという言葉は聞いたことがないそうだ。科目ごとに
 ノートをあつらえるということも、ほとんどないとい
 う。配布資料に書き込むか、横着な学生になると教員
 の板書を携帯電話で撮影して済ませる。大学文書館で
 保存できる講義ノートの下限は、20世紀かもしれない。

(もりもと さちこ)

特定歴史公文書等の新規公開について (2015年8月1日～2016年1月31日)

前号にご紹介してから新しく公開された特定歴史公文書等は次の通りです。

施設部

経理部管財課旧蔵資料

資産管理部

資産管理部資産課旧蔵資料

歴史資料等の公開について (2016年1月31日現在)

2016年1月31日現在、資料整理を終え閲覧提供している個人から寄贈された資料(歴史資料等)は以下の通りです。

※以下のリストは、当館のホームページからご確認いただけます(http://www.u-tokyo.ac.jp/history/02_02_j.html)。

総長資料

加藤弘之関係資料
渡辺洪基関係資料
古在由直関係資料
山川健次郎関係資料
内田祥三関係資料
紀元二千六百年式典祝状
加藤一郎関係資料
林健太郎宛感謝状
長與又郎関係資料
総長肖像パネル

教員資料

小金井良精関係資料
井上哲次郎関係資料
佐藤振五郎関係資料
柴田雄次郎関係資料
姉崎正治関係資料
坪井九馬三関係資料
ケーベル関係資料
加藤橘夫関係資料
門司正三関係資料
文学部長室旧蔵資料
若林勲関係資料
大河内暁男関係資料
滋賀秀三関係資料
小堀巖関係資料
佐藤愼一関係資料
福武直関係資料
昭和44年1月10日全学集会録音記録
上村洸関係資料
平石直昭関係資料
田代義徳関係文書(写)

今井登志喜関係資料(大内事件関係資料)

職員資料

供待所不法占拠の経緯
東京帝国大学本部構内実測図
昭和11年本郷帝国大学航空写真
神谷乙次郎関係資料
田中氏(文書掛)寄贈資料
乗鞍コロナ観測所スライド

学生資料

Die ersten Lectionen des deutschen Sprachunterrichts(大学南校編1870年)
鈴木良輔関係資料
石川千代松関係資料
鶴見求馬関係文書
宮岡恒次郎関係資料
銀製カップ
川瀬善太郎関係資料
澤邊正三・弘関係資料
肥田七郎関係資料
富田忠太郎関係資料
井上匡四郎関係資料
鶴見正四郎・正彦関係資料
蠟山長治郎資料
佐藤謙太郎関係資料
今泉茂松関係資料
石黒五十二関係資料
阿久津國造関係資料
ナウマン講義ノート(小藤文次郎記)
都立西高・西村房太郎関係資料
井上民雄資料

上田清・康太郎関係資料 法学部学生

加藤栄蔵関係資料
谷口義治関係資料
守矢日出男関係資料
中小左次郎関係資料
小柳靖夫関係資料
杉豊関係資料
宮原俊雄関係資料
谷武治郎撮影資料
堀俊蔵受講ノート(法学部)
三浦成夫関係資料
秋山進関係資料
遠藤哲次郎関係資料
高浦昭関係資料
岸川鐵太郎関係資料
菱刈隆永関係資料
第七期新兵 東京帝国大学法学部
思ひ出の記
北川潔受講ノート
岩松良関係資料

関係団体資料

明治8年第1回文部省留学生監督(正木退蔵)の会計報告簿冊
故アリヴェー銅像関係資料
昭六会関係資料
庶務課関係資料(昭和6～62年)
馬術部他運動会関係資料
シェークスピア賞牌関係資料
駒場地区航空写真

その他

田口卯吉関係資料
床次竹二郎書簡

小柳卯三郎宛書簡 (写)	昭和 6 年航空研究所行幸記念映画	と総合壮行式)
史料室アルバム	小関恒雄関係資料	小池行松関係資料
谷本宗生寄贈資料	昭和 17 年入学宣誓式宣誓文	大講堂振り鐘
後藤久寄贈絵葉書	読売新聞ニュース焼付版 (東大出陣	東京帝国大学印

今後も引き続き、東京大学に關係する資料・学内刊行物のご寄贈をお待ちしています。

業務日誌(抄) (2015 年 8 月～2016 年 1 月)

※(本): 於本郷本館、(柏): 於柏分館

8 月 3 日	森本、加藤、くずし字 OCR 認識について凸版印刷へ視察	11 月 11～13 日	森本、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会全国大会参加 (秋田)
8 月 4 日	東京外国語大学文書館 (2 名)、視察のため来館 (本)	11 月 15 日	辻仁佳子、事務補佐員退職
8 月 5 日	森本、加藤、東京大学生産技術研究所(駒場)にて第二工学部文書の調査	11 月 17 日	東京大学アメリカ太平洋地域研究センター (2 名)、高木八尺資料引き取り (本)
8 月 6 日	南開大学 (1 名)、視察のため来館 (本)	11 月 19 日	白川、第一ゼミナール・ファロスより情報誌『Prologue』の取材 (柏)
8 月 6 日	森本、自然科学系アーカイブズ研究会にて報告 (高エネルギー加速器研究機構)	11 月 24 日	総務課・文書館打合せ、館員打ち合わせ (本)
8 月 19 日	館員打ち合わせ (本)	11 月 24 日	加藤、150 年史 WG 第 7 回報告会へ参加・報告 (本)
8 月 28 日	学習院大学アーカイブズ学専攻 (1 名)、来館 (本)	11 月 30 日	谷口由美子、事務担当着任
9 月 2 日	森本、小川、田口文太資料整理について防衛研究所原剛先生、嘉治憲夫氏と打ち合わせ (本)	12 月 3 日	森本、自然科学系アーカイブズ研究会出席 (核融合科学研究所)
9 月 3 日	国立国語研究所 (2 名)、視察のため来館 (本)	12 月 7～8 日	森本、北海道演習林に保存資料調査のため出張
9 月 8 日	加藤、150 年史 WG 第 4 回報告会へ参加 (本)	12 月 12 日	加藤、情報知識学会第 20 回情報知識学フォーラムへの参加
9 月 9 日	小根山、テクニカルライティングセミナー参加 (柏図書館)	12 月 17 日	内閣府 (3 名)、国立公文書館等指定後 1 年の現状調査のため来館 (柏)
9 月 29 日	館員打ち合わせ (本)	12 月 22 日	館員打ち合わせ (柏)
9 月 30 日	加藤、150 年史 WG 第 5 回報告会へ参加 (本)	12 月 24 日	森本、加藤、文書館建築・保存環境について国文学研究資料館に施設見学
10 月 1 日	加藤、白川、水損行政文書のレスキュー活動参加 (常総市役所)	1 月 1 日	宮本隆史、特任助教着任
10 月 1 日	加藤、国立歴史民俗博物館出張	1 月 11～15 日	加藤、宮本、台湾の国家檔案局、台湾大学、政治大学、中央研究院視察
10 月 1 日	小根山、水損行政文書のレスキュー活動参加 (常総市役所)	1 月 19～21 日	小川 (～20 日)、小根山、法人文書移管等について京都大学大学文書館にて東北大学史料館との合同研修参加
10 月 7～9 日	加藤、大学史資料協議会参加 (仙台)	1 月 24～31 日	白川、科研「近現代アーカイブズにおける秘密情報保護と公開促進の両立に向けた研究」によるイギリス出張
10 月 14～15 日	白川、EASTICA 第 12 回総会及びセミナー参加 (福岡)	1 月 25 日	加藤、宮本、国際シンポジウム「Hathi Trust とデジタルアーカイブの未来」参加
10 月 17 日	第 14 回東京大学ホームカミングデイにおける特別フォーラム「安田講堂の 90 年～生まれ変わったシンボル、時代の歩みとともに～」に協力	1 月 28 日	坂の上の雲ミュージアム (1 名)、企画展「子規と帝国大学」の展示資料借り出しのため来館 (本)
10 月 23～24 日	柏キャンパス一般公開 2015 参加		
10 月 27 日	館員打ち合わせ (柏)		
10 月 29 日	加藤、150 年史 WG 第 6 回報告会へ参加・報告 (本)		

文 書 館 ト ピ ッ ク ス

常総市役所の水損行政文書レスキュー参加記

2015年9月に発生した台風第18号の関東・東北豪雨により、常総市役所の永年保存文書約25,000点が、水損による甚大な被害に見舞われた。これを受けて、常総市を中心に茨城史料ネットや国文学研究資料館、茨城県立歴史館等によるレスキュー活動が展開された。当館スタッフは、9月から10月にかけて、行政文書レスキューのボランティアとして3回参加した。

うち1・2回目の作業では、水濡れのため作動しなくなった永年文書庫の文書を、人力で搬出することが最優先された。収納設備関係の業者の方々も参加していたことが印象的である。庁舎内へ文書を搬入後、国文学研究資料館准教授の青木氏が、紙資料レスキュー方法のフローチャートを示し、被害状態に合わせた文書の処置作業の方針を定めた。そして、乾燥室搬入班、乾燥室内整形班、エタノール班の3班に速やかに分かれた。3回目の作業は、室内で整形・乾燥させていた文書のエタノール洗浄である。簿冊の破れ目に小バエが卵を産みつけ、ウジが大量発生していた。それらを網と刷毛を使い、エタノールに浸しながらこそぎ落とした。

活動中に気づいたことは、作業全体を見渡す青木先生のようなリーダーの存在と、レスキュー経験者や保存科学等専門分野の方々の動きに牽引される形で、ボランティアが直ちに組織編成される仕組みが備わっていることである。さらに、ボランティアが継続して活動できると、より厚みの増したレスキューになるであろう。

常総市が公表した「水損行政文書等復元計画」では、2017年9月を文書の復元完了時期とされている。しかし、修復作業はその後もかかる見込みである。この活動に注目し、応援していきたい。(小根山 美鈴)

国際公文書館会議東アジア地域支部 (EASTICA) 第12回総会及びセミナーに参加して

2015年10月13日～16日に福岡で開催された国際公文書館会議東アジア地域支部 (EASTICA) 第12回総会及びセミナーに研修の一環として参加し、14日に行われた特別講演とセッション1、15日に行われたセッション3とセッション4を聴講した。今回のセミナーのテーマは「デジタル時代のアーカイブ再び」であった。2016年1月より本格的にデジタル・アーカイブズ部門を稼働させる当館にとってまさにタイムリーなテーマである。いずれの講演、セッションも参考になったが、とくに米国国立公文書館のパメラ・S・ライト氏と英国国立公文書館のメアリー・グレッドヒル氏によるプレゼンテーションから学ぶことが多かった。

両国の国立公文書館では、徹底したユーザー調査と分析を行い、トップダウンによる戦略的な記録のデジタル化を進めている。決して安価ではないデジタル化という作業 (digitisation) を進めるために必要不可欠な要素は、戦略、分析、予算、トップダウン、連携であるということが両国の国立公文書館の取り組みで実証されており、グレッドヒル氏が講演の中で使用した「計画的デジタル・アーカイブズ (digital archives by design)」という表現が印象的だった。デジタル複製を含む情報の共有化とその手法は、当館における今後のデジタル・アーカイブズ構築において参考になる内容であった。

また、英国国立公文書館では2016年度より始まるボーンデジタル記録の移管に向けたインフラの強化とそのプロセス拡大について取り組みがなされてきた。グレッドヒル氏の講演では、大量のボーンデジタル記録の移管の際に行う、公開のための審査プロセスに関する問題点が挙げられていた。記録を取り巻く環境がハイブリッドから急速にデジタルへ移行している今、当館でも早急に体制を整える必要があることを強く認識させられた講演だった。(白川 栄美)

東京大学文書館ニュース 第56号

ISSN 0915-3284

発行日：2016年3月31日(年2回発行)

編集・発行：東京大学文書館

〒113-8654 東京都文京区本郷7-3-1

電話：03 (5841) 2077 (直)

http://www.u-tokyo.ac.jp/history/index_j.html

印刷所：株式会社ワーナー